

Celery

campus
communication

セロリ
No.29
1998

中村学園大学
中村学園短期大学

広報誌

- 卒業生へメッセージ
「社会への出立にあたり」◎P 1
- 卒業生インタビュー◎P 2
- 平成9年度科学研究費補助金
対象研究の目的と内容◎P 3
- 食生活とガン予防と「ためしてガッテン」◎P 5
- 食物栄養学科学術講演会◎P 6
- 児童学科講演会
安永藍子先生「青春の魅力」を語る◎P 6
- アジア栄養科学ワークショップを開催◎P 6
- 料理の鉄人による中国料理◎P 6
- 座談会◎P 7
- 定期演奏会から◎P 9
- サークルリーダー研修会を実施◎P 9
- 学友自治会後期総会を終えて◎P10
- 学園祭収益金を寄付◎P10
- 退職される方々からのメッセージ◎P11
- 平成9年度後援会地区連絡会◎P13
- あさひ幼稚園創立30周年◎P13
- 日本栄養改善学会学会賞◎P13
- 厚生大臣表彰◎P13
- 全国栄養士養成施設協会会長表彰◎P13
- キャンパスこの1年の動き◎P14
- 学位取得◎P14
- 海外出張の記録◎P14
- 教職員の動き◎P14
- コラム◆
「子どもの心」／P 4
「広く世界に目を向けて」／P10
「健康生活のススメ」／P12
1冊の本「びあじお」／P14

社会への 出立にあたり

困 難な時代を乗り切る ための努力を

学長 山元 寅男



ません。

今こそ、戦後の繁栄の道のりを検証し、戦後の廃墟の中で、食べる物や物資の不足に喘ぎながら頑張った日本国民の、あのハングリー精神を必要としていると思います。皆さんも、学園祖中村ハル先生のご遺訓である「努力の上に花が咲く」を忘れることなく、この困難な時代を自らの努力によって乗り切って頂きたいと思っています。

近頃、テレビやラジオ、さらには新聞等で、官僚の汚職や学校でのいじめが報じられない日はありません。日本人の心の荒みは、一部の人々とは云え、認めざるを得ません。衣食足りて礼節を忘れたのでしょうか。これも日本人が自信を失ったせいでしょうか。

皆さんは、本学在学中に、多くの人々との出会いがありました。その出会いの中で、人間としての心のぬくもりに感動を覚えたことも度々あったことと思います。社会に出て大切なことは、人の心のぬくもりであり、感動ではないでしょうか。これらの感動をもって至誠を貫く人生を送って下さい。

皆さんのご多幸とご健勝を祈っております。

本年度無事学業を終えられ、大学院・家政学部・短期大学をそれぞれ卒業し社会へ巣立って行かれる皆さん、卒業誠におめでとうございませう。皆さんは、これまで本学において、学園祖中村ハル先生の建学の精神に基づいた、厳しい教育と熱意とにより、高度職業専門家として、また、それぞれの専門性を身につけた社会人として必要な知識と技術と態度とを身につけられました。これからそれらを生かして存分な活躍が期待されております。

さて、現在、我が国をはじめ、アジア諸国においては財政金融破綻の

嵐が吹きまわっております。各国の国民は、経済的不安に戦きながら、明日への希望もつい失いがちの生活を強いられている状況にあるのではないかと思われます。

我が国も例外ではなく、政治・経済の混迷の度は深まるばかりであります。政治家も企業家も経済界の人々も皆自信喪失の状態にあると云っても過言ではないでしょう。戦後半世紀にわたり、我々の先輩が血と汗のにじむ努力によって築いてきた我が国の繁栄の中に、すっぱりと埋没して、何ら新しい方向を見つけて出す努力もせず、今日に至っているのではないかという気がしてなり

学生時代に目指す道を見つけ、
それぞれの夢へはばたいていく卒業生
同じ空間・同じ時間を持った仲間でも、
その過ごし方はこんなに様々。
どんなことを経験して、何を得たのか、
これからの夢などを卒業生に聞いてみました。

VOICE 卒業生 インタビュー

『自信につながった経験』



【大学・食物栄養学専攻】
岩切 智子

講義や実習・実験などで学んだことを生かして栄養指導関連のゼミを頑張りました。夏休みの早朝に集合して参加した成人健診は、初めてで大変でしたが、自分の自信にもつながる良い経験になりました。ゼミはネットホームな雰囲気、勉学以外でもとても充実した毎日を過ごすことが出来ました。

『大学生活で得た財産』



【大学・管理栄養士専攻】
姫井 美和子

刺激的な友人にめぐり合えたことと親元を離れた生活を経験して「家族の有り難み」「生活することの大変さ」を実感できたことが大学生活の何よりの財産です。卒業後は、歌って踊れる素敵な管理栄養士として頑張ります。

『仲間同士の団結で親友に』



【大学・児童学専攻】
野口 哲也

サークル活動(サッカ)を、仲間の支えもあり最後まで続ける事が出来ました。大学では、男子の仲間同士が団結して親友になれたような気がします。四月からは社会のルールを破らない子供たちから尊敬されるような保父として頑張りたいです。

『人として大切なことを学んだ』



【大学・児童教育学専攻】
中庭 直美

入学してすぐバレー部へ。集団競技でもあり、練習や試合までの過程では、みんながうまくいかなかったり、一つ一つのことが多くありました。その一つ一つが大切な思い出です。勝敗だけではなく、人として大切なことを学んだ気がします。バレー部の仲間の温かさ、優しさはこれから社会に出る私の支えになると思います。大学での経験を生かし、自分らしく頑張りたいと思います。

『連日宿泊した大学院での実験』



【大学院・栄養科学研究科】
渋谷 聖

大学院での研究は、本当に貴重なものでした。自分の部門はもろろんのこと、大学生の頃には体験できなかった各分野の最先端の研究に触れ、大変勉強になるとともに、視野が広がりました。連日宿泊して実験を行ったこともあり、本当に大変でしたが、良き指導者・良き協力者に恵まれたおかげで乗り越えられたと思います。

『本当に進みたい道を見つけた』



【短大・食物栄養科】
中野 琴井

実習や実験が多く、忙しい毎日でしたが、私は勉強はもういいことアルバイトも頑張りました。卒業後の進路は食物栄養とは別の分野ですが、たくさんアルバイトの経験の中で自分の本当に進みたい道が見つけれられて良かったと思っています。短大での二年間はあっという間に、目標を見つけたいろいろな経験をして下さい。

『行動範囲が広がった』



【短大・家政科】
山口 静香

家政科では、被服や調理など家庭的な面と、コンピュータや秘書実習など社会に出て役に立つ面と両方学べました。特にコンピュータは、授業やゼミで使ううちに興味をもち、今はいろんな所で活用しています。卒業後は、どんな時も前向きに、そして自分の行動に責任を持ち、信頼されるような社会人になりたいと思います。

『初めての「せんせい」』



【短大・幼児教育科】
中村 亜有美

実習日誌・設定保育の準備で毎日眠れなかった幼稚園・保育園での実習が心に残っています。でもそんな苦労も初めて「せんせい」と呼ばれた時のことを思い出すと乗り越えることが出来ました。四月からは、保母として勤めますが笑顔を忘れないで、温かい気持ちで子供を受け入れてあげられる保育者になりたいです。

平成9年度 科学研究費補助金 対象研究の目的と内容 (上)

前号(第二十八号、平成九年十月二十九日発行)でお知らせしたとおり、文部省から交付される科学研究費補助金対象研究の内、平成九年度新たに補助される九件の各研究について、その概要を今号と次号で紹介する。

前近代中国における 都市化と水利問題

〈基盤研究(C)(2)〉

家政科 教授 西岡 弘晃



「東洋社会停滞論」。これはドイツのウイトフォーゲルが一九三〇年代に理論的に体系化したアジア社会論である。大河に依拠した農業生産を経済基盤とする中国においては、水の確保のために、共同体を超えた大規模な治水灌漑機構が不可欠となり、その機構の維持運営は必然的に専制的国家権力を生み出し自ら発展することはできないと言った。しかし、「水の理論」と言われるこの理論は、西洋近代思想に立脚した地理的な環境決定論のもつ非歴史性と論理矛盾を内包するものであった。

中国水利史研究は運河水利、治

水灌漑、農業の生産構造・技術的量的発展の研究のみでなく、国家と民衆との接点をなす水利組織の分析を通して、歴史学の中核をなす国家権力の諸段階を解明し、この「停滞論」を打破した重要な分野である。

今回のテーマ「前近代中国における都市化と水利問題」は、このような研究史の中で、地域、性格を異にする開封・成都・寧波三都市を取り上げ、都市の成立と発展の要因を水利の視点から分析し、地域的特徴の類型化を目指す。都市水利は飲料水、生活用水の確保、排水路の整備、水災防備、城内水運路の整備と管理、遠隔地交通路としての運河整備、増加した都市人口扶養のための農業用水確保、さらには水辺の娯楽のための湖川などが対象となる。これらを総合的に検討することによって中国社会の歴史的発展の経緯を実証することを目的としている。

久山町高齢者の栄養状態 に及ぼす栄養摂取とその 加齢による変化の研究

〈基盤研究(C)(2)〉

食物栄養学科 食物栄養科

教授 城田 知子(代表)



二十世紀には六十五歳以上の人口が全人口の約四分の一を占めるともいわれるわが国が、「高齢社会」を基本条件として展開していくことは間違いない。その中において高齢者の健康増進、疾病予防は重大な社会問題となりつつあり、高齢者の栄養状態を正確に把握し、適切な栄養管理を行うことの重要性については論を待たない。高齢者には加齢に伴い各臓器の予備能が低下したり、複数の疾患あるいは前病状態を伴っていることが多く、栄養摂取等の評価においては歴年齢のみによって評価するにはあまりにも個人差が大きい。エネルギー代謝の動態についても同様なことが考えられる。

高齢者の特徴の一つでもある低タンパク栄養状態(低アルブミン血症)が、基礎疾患の有無にかかわらず、生命予後やADL(Activities of Daily Living)と密接に関連するとの報告もあり、栄養摂取水準を明らかにするとともに、その食事や食事内容に及ぼす影響因子について構造的に把握することは重要であると考える。

本研究においては久山町研究の第三集団(一九八八年)の中から六十歳以上の男女を追跡研究の対象とし、成人検診時に実施した栄養調査等の解析をとおして、摂取栄養素のレベルや加齢変化、さらにその特徴をADLや社会的ネットワークとの関連で明らかにしようとするものである。追跡集団として第四集団(一九九二年)と本年実施する一斉検診により、

同一対象の十年間の追跡研究が可能となった。

食物アレルギーの発症機序と腸の防御機構に関する免疫組織化学的・超微形態学的研究

〈基盤研究(C)(2)〉

食物栄養学科 食物栄養科

教授 藤田 守(代表)



私たちが毎日摂取している食物は、人体にとって栄養素になると同時に異物にもなり、重要なアレルギーの原因物質であることに注目しなければなりません。

食物アレルギーの発症機序における初期段階の一つに、食物性アレルギー(食物性抗原が消化管粘膜上皮層を高分子のまま侵入し、粘膜固有層内の防御系細胞に認識されることが挙げられます。一方、このような食物性抗原の侵入に対する防御機構として、唾液、胃液、タンパク分解酵素、粘液などの非免疫学的因子と分泌型免疫グロブリンA(IgA)や消化管リンパ組織などの免疫学的因子があることが知られていますが、まだそれらの機構に関しては不明な点も多いようです。

【子どもの心】

26

児童学科・幼児教育科
講師 古相正美

私には子どもがいない。親の弁を借りるならば、「おまえには子どもの事はわからない」となる。しかし、いないからこそ、わかる部分もある。高校生でおじさんになった私は、それ以来、甥姪や友人の子どもと接してきた。様々な子育ての模様をよそ目ながら見てきた。

よく、人は環境の産物だなどと言われる。個人の資質と環境との関係は、いまだに結論が出ていないという。性善説に立つのか、性悪説に立つのか。日本の妖怪たちが、そして欧州の妖精たちが、さらに池波正太郎流にいうなら人間そのものが、善事を行いながら悪事をも行うように、子どももまた、善事をも悪事をも行い得る。社会的分別が不足し、己を律する心が弱い分、その表現法は稚拙となり、時には驚くような行動となる。それは、本人自身にとっては、大人の世界が感じる程の驚きを持っていない筈である。必然の行動である筈だ。そうした分別を与えるものが、環境であり、教育であろう。

周囲の子育てを見ると、そうした分別を与えられている子どもは見えて好ましく、また、居心地の良い家庭だと感じられる。戦後、誤解され、いまだに訂正されていない自由という概念をもう一度見直すべきだろう。分別を教えられても、自由はなくなりはいない。いや、分別があるからこそ自由を謳歌できるのだということが大切だと思う。

また、おやじに「だからお前は子どもの事がわからない」と叱られそうだ。

そこで本研究では、実験動物を用いて、食物アレルギーの発症機序を解明する目的で、消化管におけるタンパク等の高分子物質の吸収に関して実験を行い、さらに食物性抗原を用いて粘膜上皮層への侵入経路について検索します。また、食物性抗原の侵入に対する非免疫学的因子による防御機構を明らかにするために、発達段階における胃の主細胞、壁細胞、表層粘液細胞、小腸、大腸の粘液細胞等の変化を検索します。さらに、免疫学的因子による防御機構を知るために、IgAを動物の血管内に投与し、消化管上皮細胞内をどのようにして通過し、管腔表面に分泌されて異物の侵入を防御するのかについても電子顕微鏡等を用いて詳しく検索を行うつもりです。

食生活による動脈硬化 予防研究の新視点

—HDLレセプターとの関連—

〈基盤研究(C) (2)〉

食物栄養学科 食物栄養科

助教授 原 孝之



現代人の栄養の課題「食生活による動脈硬化予防」と言うとき、誰もが、高密度リポ蛋白質(HDL)―コレステロール(C)の事を思い浮かべるであろう。しかし、HDL―Cは単なるHDL中のCの量の事だけで、HDLの本来の機能、肝への逆転送と何ら結びつくものではない。HDLの逆転送

の機構は今なお全く解明されていないと言ってもよい。それは、HDLレセプターの分子的性質が今以て十分解明されていないことに起因している。

筆者らがHDLレセプターの研究を始めたのは九八七年頃である。当時、筆者はACTH刺激による副腎のステロイドホルモン合成について研究していたが、これにHDL中のCが材料に使われることを見出した。その当時、本合成には低密度リポタンパク質(LDL)―Cが使われると信じられていた。それ以来、HDLレセプターを追求し、これが分子量十二万の蛋白質であることをつきとめた。

本研究では、ウサギ肝臓のHDLレセプターを精製し、そのcDNAをクローニングすることを第一の目標としている。さらに、ヒトのcDNAを単離し、それをプローブとして、血中リンパ球や単球中のHDLレセプターの発現を調べたいと考えている。もしも、動脈

硬化とHDLレセプターの発現との間に何らかの関係があればそれから食生活による動脈硬化予防研究の新しい糸口が見つかるかもしれない。この分野の研究には新しい突破口が求められている。



食生活と、がん予防と『ためしてガッテン』

「報告書『食物、栄養とがん予防・世界的展望』を発表」

食物栄養学科・食物栄養科 教授 廣畑 富雄



食生活ががんの発生に重大な関

わりがあるということが、近年の多くの研究で明らかになってきた。それを背景とし、我々世界の十五人の学者は、世界がん研究基金／米国がん研究財団の依頼を受け、食生活とがんに関する報告書及び勧告書を作成した。これは世界の約四、五〇〇の研究結果を評価検討し、がん予防と食生活との関係を明らかにしようとしたものである。そしてどのような食生活をすべきであるかをまとめ、十四ヶ条の勧告を行った。もしタバコに関する勧告を含めるなら、十五ヶ条の勧告になる。なお食生活は広い意味にとり、飲酒、肥満、運動も含めている。我々は人々がこの勧告を守れば、世界的に見て、がんの三〇～四〇％は予防可能であると推定した。

この作業は本当に大変な作業であり、国際会議を七回開いて編集作

業を進め、一九九七年九月に三年越しの作業がやっと完成し、出版のはこびとされた。この話が持ち上がったのは一九九三年九月、世界栄養学会がオーストラリアで開かれ、「栄養を変え、ることによるがん予防」というシンポジウムの講演者（シンポジスト）同士の間で、一つやろうじゃないかと気運が盛り上がったのが始めである。

前置きが長くなったが、それでは内容はどうかと読者の方は聞かれるに相違ない。報告書は約六七〇ページで（英文）、これは図書館に寄贈してあるので、興味のある方はお読み下さい。また要約Summary（英文）も別に出版されている。Summary

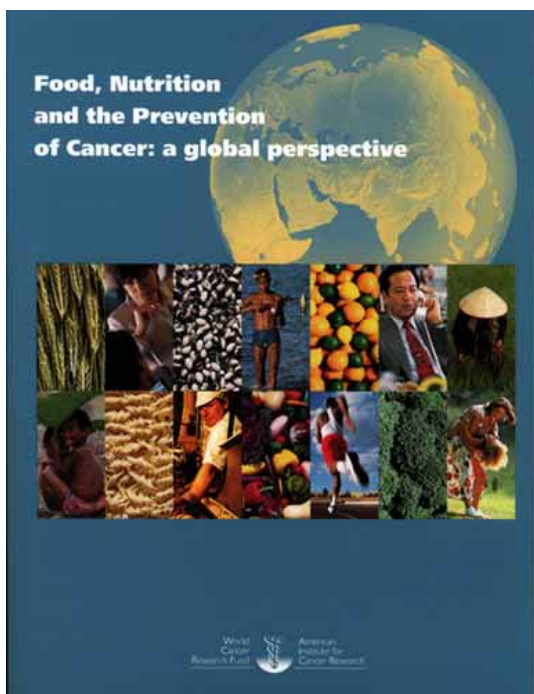
の方は若干手持ちがあるので、ご希望の方はご連絡下さい。日本語版はこの要約を訳し、私の解説を加えて出版したいと思っている。簡単な日本語の紹介は、一月号の日経メディカルに載っている。あるいは日本医師会雑誌の本年春出版（四月号）にライフスタイルとがんという題で私の論文が載るがその中に述べているので、それを読んで頂いてもお役に立つと思う。非常に分かりやすく書いたつもりである。

この報告書及び勧告書は、世界的

に反響が大きかった。たとえば英国のBBCは、トップニュースとして報道した。我が国でも、NHKが放映した。だめしてガッテンは、随分反響が大きかったようで、約一六〇〇万人の人が見たと推定されている。私が感心したのは、だめしてガッテン制作グループが、本当に真摯に番組制作に取り組んでいることである。担当のディレクターは約一ヶ月の間、かり切りだったし、絶えず私と電話やファックスでやりとりしながら制作を進めた。間違いがないように非常に注意して作業を進めた。放映二週間

前のビデオとりをとっても、五～六時間かかっている。編集に担当のディレクターは連日深夜まで苦勞している。「これからはテレビの前で、正座をして視なければいけないな」と言うたことであつた。ちなみに民放の屋の人気番組などは、間違いだらけでNHKとあまりにも差が大きいのが事実である。（そのつもりで注意してみて下さい）

最後になつたが、食物栄養は本学のメインテーマの一つであり、読者の方がこの方面に二層の関心を持ってくだされば何よりのことと思っている。



▲英文で約670頁のこの報告書は、本学図書館にも寄贈されている。

■食物栄養学科学術講演会

—今回は、香辛料とヒトの健康との関わりについて—

平成九年十二月十九日大講義室で主に食物栄養学科の学生・院生を対象に、栄養科学研究科主催の「健康に寄与する抗酸化性成分の科学—香辛料を中心にして—」と題する講演会が行われた。講師は、植物性食品の抗酸化性成分に関する化学構造研究では、世界のトップグループに列されている大阪市立大学生活科学科の中谷延二教授(写真)であった。香辛料に感覚刺激機能ばかりでなく酸化を防ぐ抗酸化性、腐敗を防止する抗菌性さらにはヒトの生体調節機能に関わる多くの成分が存在しているとする含蓄深い話から、香

辛料の産地である東南アジアの風物も披露され、会場を埋め尽くした二百五十余名の聴衆から笑いもれるユツクかつ充実した講演会であった(文責/食物栄養学科 太田 英明)



■アジア栄養科学ワークショップを開催

—今回のメインテーマは『勝つためのスポーツ栄養』—

第六回アジア栄養科学ワークショップが中村学園大学栄養科学研究所の主催で「勝つためのスポーツ栄養」と題して、十二月二十九日に開催されました。

まず、最初の講演ではスポーツ栄養の分野でユツクな研究をされている筑波大学の鈴木正成教授が「スポーツ栄養の現状について」というテーマで講演され、続いて鹿屋体育大学の萩原純雄教授が「体育大学でのスポーツ栄養の取り組みについて」と題して講演されました。さらに、本学の今村裕行助教授から「コーチ監督に求められるスポーツ栄養について」という

テーマで講演があり、最後に明治製菓の奈良典子管理栄養士が「オリンピック選手の栄養管理について」というテーマで講演されました。



一般市民、本学学生など三百名を超える参加者があり、フロアーを交えての質疑応答も活発な雰囲気の中で進行し、盛況の内に閉会しました。

■平成九年度児童学科講演会

—安永蒔子先生「青春の魅力」を語る—

今回の児童学科講演会は、二月二十九日に熊本在住の歌人、書家であり、平成十年歌会始選者でもある安永蒔子先生(写真)をお招きし、「青春の魅力」と題して講演を頂いた。

先生は、青春時代の思い出から説き起こされ、古典に学ぶことの大事さを語るとともに、若き日に座右の書をもつこと、人間としての生き方を培うことこそ学びの心であることなどを、学生諸君に強く訴えられた。また、学問とともに、芸術に親しみ、感性を磨くことが、とくに教師をめざす若者にとって重要であることを和歌づくりの経験などを踏まえて説かれた。

さらに歌会始の様子なども生き生きと語られ、その凛とした生き方ともども聴衆に強い感銘を与え、誠に意義深い講演会であった(文責/児童学科 青木 英美)



■料理の鉄人による中国料理

—特別講座「プロの料理人による料理示範」第二回—

料理のプロによる特別講演並びに料理示範の本年度第二回目は東京赤坂四川飯店社長陳健二氏(写真)を迎えて、平成九年十二月十日に行われました。陳氏は現在、テレビ番組「料理の鉄人」にて活躍中で、中国料理界の第一人者でもあります。氏は、巧みな包丁さばき、技術を用いながら、手近な材料に四川省の本格的な中華調味料を使った新しい感覚の中国料理を四品披露されました。なかでも好評だったのが「陳麻婆豆腐」。今日皆に親しまれている麻婆豆腐を日本に紹介し、広めたのは他ならぬ陳健二氏の父陳健民氏であり、本場の味を試食した学

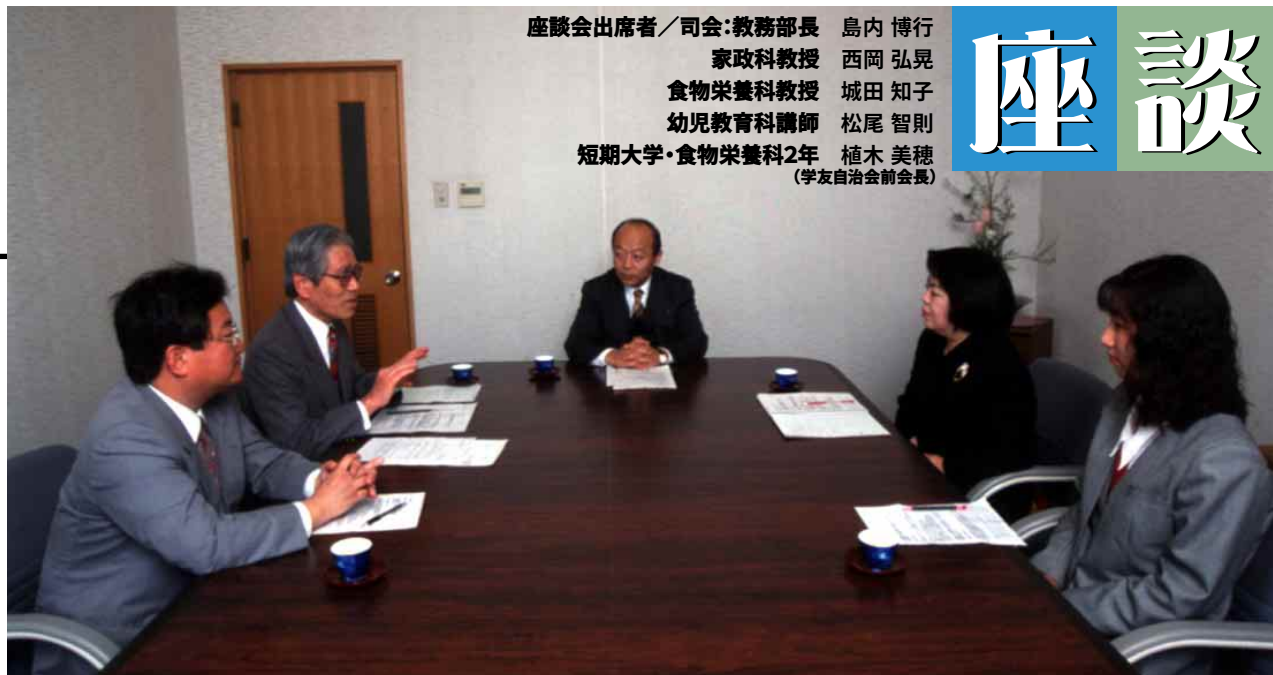
生たちは強烈な辛味に驚きながらもその美味しさに感動した様子でした。「食」の領域に携わる者として調理への関心を高め、より豊かな感性を育むことを目指したこの特別講座は、食物栄養学科・食物栄養科の学生たちに深い感銘と大いなる啓発を与えたことと確信しています。



(文責/食物栄養学科 吉岡 慶子)

座談会

座談会出席者／司会：教務部長 島内 博行
家政科教授 西岡 弘晃
食物栄養科教授 城田 知子
幼児教育科講師 松尾 智則
短期大学・食物栄養科2年 植木 美穂
(学友自治会前会長)



短期大学名称変更、4月から 中村学園大学短期大学部へ

「名称変更の意義と 目的について」

島内：まず、最初に、この歴史ある中村学園短期大学が4月から中村学園大学短期大学部と名称変更するにあたって、その意義や目的について西岡先生から説明いただけますか？

西岡：名称変更は、社会や学生のニーズに応じた教育内容・校風をつくりあげるために、大学と短大が一体となり自己改革に取り組みやすくすることを目的として行われるものです。その自己改革とは、次に挙げる3つのことで、1つは、短期大学と大学が現在の規模に発展したことで遠心的になりがちであった教職員・学生の心情を一つにし、さらに発展への意識を高揚させること。2つめは、学内においてはファカルティ・デイバロフメントや共同研究が二層推進され、学外に対しては共同で開催する公開講座等を充実し、地域への貢献を深めること。3つめは、私学を取り巻く厳しい環境に対処し、それに耐えうる活力を維持した上で、本学の教育の特色を生かせるように組織を整え、事務組織などの効率的な運営ができるように改めることでしよう。この自己改革の実現は、中村学園のイメージアップにもつながり、短期大学で〇〇大学短期大学部というように名称変更するところが年々増加しているという全国的な流れにも合致するということです。

「それぞれの立場から 受けた印象について」

島内：これまでも大学と短大は同じ敷地の中にあつて、それぞれが協力できるところは協力しあつて発展して

まいりました。今、西岡先生が言われたように、名称変更が行われることにより、さらに大学と短大が一体となつて、教育や研究活動や学生生活を含めて協力し高め合うことができると思われますが、皆さんはどのようなお感じですか？



城田 知子 教授

城田：そうですね。ある面では別々にある面では共通の目的をもつてやってきましたということがありますが、今回の名称変更が行われることで新しい枠組みになつて、大学と短期大学に一体感が強くなつたと思います。また、これによってさらに地域に貢献できるようになつていくのではないかなという感じを受けました。名実ともに短期大学部がいい学校と言われ、10年先、20年先に優れた形であり続けるために、今必要な改革を進めていかなければならないですね。

松尾：新しい名称を聞いた時に、私は名前が長くなつたなという印象でした(笑)。しかし、物事が変わるにはきつかけとかが必要です。名前の長さに最初は違和感を持つても、それが逆にこだわりになつて、いろんな所に目が行くのではないかなと思います。本学では4月から抜本的な見直しを全学で行い、中身が変わるので、名称も変わった方が分かりやすい。そういった意味でタイミングがいいですね。

西岡：平成3年の大学設置基準の大綱化から短期大学の位置付けが大きく変わったと思うんですよ。卒業時

に準学士の学位が取れますし、4年制大学への短大からの編入が制度的に整備され、就職後も専門的に学びたい場合には3年から編入ができるようになりました。しかし、中村学園では、大学の食物栄養学科と短大の食物栄養科、大学の児童学科と短大の幼児教育科といった同じような学科を持つていても関わらず、学生の交流ができていませんでした。これから名称変更を機に改革が進めば、将来的な展望として大学への3年次編入の門戸がより開かれるでしょう。また、短期大学部が中村学園大学の名のもとに総合大学になり、短大が名実ともにその一翼を担うという意味合いが強くなるから、本学にとつては非常にいいことであると思えます。



西岡 弘晃 教授

島内：では、名前が変わることを最初に聞いた時に植木さんはどう感じましたか？

植木：多少とまどいはありました。私自身、大学に吸収されるというところをえ方をしていたので、でも将来的なビジョンでみるとそこから得られるメリットがすごく大きいということなので、今では短大にとつてとても良いことだと捉えています。

「名称変更の利点と、 発展の可能性について」

島内：今後はこれまでに以上に、大学と短大の両方が力を合わせてやっています。

くということ、どういう点でお互い協力をして発展していくかを考えなければいけないわけですね。では、今後、教育面ではどう変わっていくのか。授業や単位、カリキュラムや編入学の面などからお話を伺いながらその可能性を探ってみたいと思います。

西岡：これまで大学と短大の両方を教えておられた先生方は、今後、短期大学の学生を教えるというように目的がはっきりしてきますから、その面で余裕が出てきて、授業や研究活動の方にもプラスになると思うんです。必要に応じて大学の先生方と共同研究も組めますし、大学・短大双方の教員は、時にはライバルであり、時には共同研究者であり仲間でありという、いい関係が構築できると思いますね。また、幼児教育科・食物栄養科の新しいカリキュラムではセミナーが必修になるから、学生と先生の個人的なつながりも増しますね。



松尾 智則 講師

松尾：大学生と短大生は、同じキャンパス内のライバル同士。今後はいい意味でライバル意識が出てくるでしょうね。大学という名前がつくことで、より大学を意識しつつ中村の個性というか、特色のある教育を展開していきたい。幼児教育科の場合は、ゼミで先生たちと相談できるような場所も置きながら、時代に合わせて教育の部分は厳しく指導していこうと思います。

城田：また、今後は編入学をきちんとしなければいけませんね。

西岡：編入学制度を確立して、短大で取得した単位を編入学後、大学で認定することになれば、単位互換を考えないといけないし、大学にあつて短大になれないような科目の受講と単位取得を認めることなども、将来的には考えられますね。



植木 美穂 さん

植木：それは、学生が求めていることだと思います。編入をしたいと思っている学生もたくさんいますし、私も希望していました。現状では難しいです。短大では2年間という限られた時間の中で、広く浅く学んでいくわけですが、大学に編入できたら、さらに専門的に学べるのではないかと思いました。

松尾：対等な立場で見ると、短大の単位を大学で認めるというのは上げ底になるんです。お互いに競争して大学の方でも短大にしかない単位が欲しいというところまで行つてはじめて完成して、くるのではないですか。

城田：社会に出てから勉強の必要性を改めて感じる人も出てくるでしょう。うし、編入学の定員枠の中にそういった人たちが受け入れられるような環境を考えていけたらいいと思います。

西岡：編入学の募集要項を集めてみると、短大からの編入と併せて社会人枠を設けているところが多いですね。文部省でもインターンシップを重視して、文系でもインターンを課するという時代です。社会人枠というのは、何年か働いた後に編入するとか、科

目等の履修生で単位を積み上げて大学院の受験資格を得るとか、短大卒の「準学士」を基礎資格としている。んなことが可能になってきています。

城田：今後は生涯学習センターをつくって欲しいですね。そこに行けばいつでもかやっているという。こういった所で日頃の教育や研究の成果を地域に貢献できたらいいと思います。また、卒業教育に力を入れて欲しいという声があります。というのは、本学では卒業と同時に資格を持つわけですから5年後くらいまで責任をもって指導してほしいということですね。これは、短期大学部になることで提案しやすくなるという気がします。

島内：では、学生生活の面ではどのように変わって行くと思われませんか？

植木：将来、大学生と短大生が共同で受ける授業ができていけば、今までは短大という2年間の枠組みの中で考えていたことが、大学という大きな枠で捕らえられるようになると共に、大学生にいろいろな刺激を受けて勉強でもサークル活動でもプラスになると思います。そうすると、学生のやる気もまた違ってくると思います。

「今後に向けての期待や目標について」



島内 博行 教務部長

島内：最後に名称変更後の短期大学への希望や目標を聞かせていただけますか？

植木：例えば、病院の栄養士になりました。

い人は病理学、幼稚園の先生になりたい人は小児栄養学と、将来の目的にそつて専門的に学びたいことがそれぞれ学生にもあるようですので、短大生が大学の授業や他の学科の授業を学べるようなシステムになればいいですね。また、卒業生のためにも、夜間授業などがあればいいと思います。

西岡：編入枠が広がるといいですね。希望者に対応できるように制度化されて広がる、学生は四年大学の前にはまず短大に行くようになるのではないのでしょうか。イギリスが日本の短大にあたる職業教育を目的とした大学を一気に増やし、高等教育への進学率を高めていますし、研修会や研究協議会などでも盛んに日本の高等教育の中核は短大だと言われます。短期大学部になるにあつて、我々もますます自信をもって学生募集できるように環境を整えていこうと張り切っています。

城田：名称が変わっても、これまでの中村学園の良さを守りながら、食物栄養科を卒業した学生たちに、食の専門家となって欲しいと思います。

松尾：幼児教育科も同じですね。本学の卒業生を、自信をもって社会に送り出せるように、名称変更を機にいろんな改善を進めて行きたいですね。

島内：いつまでもたつても母校というのは懐かしいものですし、卒業生たちが誇りに思える学校でありたいですね。今日は四月から名称変更となる中村学園大学短期大学部について、先生方と学生の代表とお話できて、私自身も今まで以上に短期大学部の発展のために努力する必要性を感じました。また、短期大学において今後の見通しが明るいような気がいたしました。

定期演奏会から ○クリスタルハーモニー ○マンドリンクラブ



▲マンドリンクラブ (12月6日：福岡市中央市民センター)

クリスタルハーモニー
▼ (12月14日：もちパレス)



十二月十三・十四日の二日間、各サークルの部長、代議委員長、学園祭実行委員長及び各パート長ならびにそれぞれの会計係が、セミナーハウス「ほくさん」でリーダー研修会を行いました。

この研修会は、リーダーとしての心構えを習得し、サークル活動の活性化と円滑化を図る目的で、毎年実施しています。

初日の午前中は、白木学生部長と古賀信幸先生が経験談を話され、その中から多くの事を習得することができました。午後は、先生方とのフリートークキングがあり、サークル運営上の問題点等についてディスカッションを行いました。夕食後さらに、サークル活動を行う際、必要となる書類作成について説明会を実施し一日目のプログラムを終了しました。

二日目は、参加者全員でバレーボールを楽しむ、相互の親睦を深めました。

この二日間の研修を通じて、参加者には、サークルリーダーとしての自覚と自信を持ってもらえたのではないかと思います。



▲2日間の研修で参加者は、リーダーとしての自覚と自信を持つ。

サークルリーダー研修会を実施

—サークルリーダーとしての心構えを習得—
短期大学 食物栄養科一年 甲斐 里美(短大学友自治会長)

広く世界に 目を向けて

3

家政科講師

Samuel Andrew Meyerhoff

Japanese society (日本の社会) evolved out of an agrarian (農業) culture. As such, the base of Japanese society was originally the village (村). People of the same village worked and lived together in harmony (同じ村の人々が協調して生活していた)

As the scale of human interaction grew during the Edo period, the village was replaced by the feudal domain (藩) for representing the base of society. However, instead of only people from the same village maintaining harmony, people from the same region had to learn to establish peaceful relations.

At last, after the Meiji restoration, Japan was united as a nation.

Today the scale of human interaction has grown once again, and the new base of society is the entire planet and, like always, we must maintain harmony.

学友自治会後期総会が十二月二十八日に、大学五百四十二名、短大六百二十五名の在学生が出席して行われました。

議事内容の主なものとして、まず本年度学園祭実行委員長の大石和典さんから学園祭について報告がありました。第三十二回霜月祭は学外情報宣伝に力を入れた結果、例年より学外から多くの方に来てもらいうことができたということでした。また、来年度の実行委員長には大曲邦晃さんが指名され承認されました。



学友自治会後期総会を終えて — 新しい自治会役員が決定 —

大学 児童教育学専攻二年 松川 昌平 (大学学友自治会長)

次に十一月十七日に行われた学友自治会長及び代議委員長選挙の結果報告が行われ、新しい自治会長に大学・松川昌平、短大・甲斐里美さん、代議委員長に川本英貴さんが学生総数の過半数以上の得票で信任され、新旧役員交替の挨拶となりました。

また、この日をもって各サークルも新旧交替となりました。同時に合同空手道愛好会の結成が賛成多数で承認され、また一つ新サークルが誕生しました。これによりサークル活動全体が層活気づくことを期待しています。

我々大学・短大学友自治会も新しい体制で来年度もより円滑なサークル活動が行えるよう努力したいと思います。

昨年十一月に行われた本学園祭「霜月祭」においてチャリティーガレージヤールを開催しました。

これは学園祭を実施するにあたり、何か社会に役立つ活動をしようにということで毎年行っているものです。

このガレージヤール開催にあたっては学園周辺の住民の皆さん方の心暖まる協力もあり、たくさんのチャリティー品を集めることができました。そのおかげで、期間中の総売り上げは十八万五千五百二十一円にもなり、大成功に終わることができました。

この収益金は全額、西日本新聞社の民生事業団 社会福祉資金に寄付し、社会のために役立てていただきたいと思います。



▲昨年11月に行われた学園祭でのガレージセール

学園祭収益金を寄付

短期大学 食物栄養科一年 大曲 邦晃 (学園祭実行委員長)

退職される方々からの メッセージ



『中村学園それは スバラシイ私の人生』

食物栄養学科・食物栄養科
教授 楠 喜久枝



私が中村学園に第三步を踏み出したのは昭和二十六年三月、日本女子大学を卒業したその年の四月でした。当時、恩師・中村ハル先生が六十四才にして念発起され、敗戦国日本の復興を目指して唐人町の公会堂で中村割烹女学院を開校された二年目の春でした。あれから四十六年の歳月が流れその間、中村学園は私を育て生かし、そして生きてきました。そんな思い出多い学園とも、いよいよお別れの時を迎え、感慨もひとしおです。

思えば昭和二十九年、現大学、短期大学の母体である福岡高等栄養学校第二期生も早や還暦を過ぎ、今や遠い未来と想っていた二十世紀は目前に迫っています。この学園も日本の高度成長とともに時の運と波に乗ってめざましい勢いで発展し、次なる新たな時代に突入しようとしています。これまで学園の祖・中村ハル先生の熱い想いの建学の精神、感恩の情に富み清節を尊び、労作にいそしみ、学究的思考と実学的行動力を持った有為な人材を輩出してきましたが、社会が大きく変革しようとしているとき、今後は一層気を引きしめてきびしい世

相に対応していかなばなりません。

過ぎ去りしあの頃、あの時どきに想いを馳せる時、そこには常に目を輝かせて、勇気、元氣、やる気を喚起してくれた多くの学生たちがいました。また、よりよい教育、研究を目指し、切磋琢磨し合った教職員の方々、それらを支えて下さった事務職の方々、これからは建学の灯をかがけ心を一つにして、私が愛した中村学園をよろしくお願い致します。

最後に、この紙上をお借りして私にスバラシイ人生の時間を与えて下さった一人ひとりに幾千万星の数より多く「有難う」の言葉で御礼を申し上げます。

『中村学園の発展 と共に三十年』

食物栄養学科・食物栄養科
教授 谷口巳佐子



設立当初より中村学園は栄養士養成校として有名でした。一九六八年、私がカナダから帰国したときには、大学家政学部管理栄養士専攻と食物栄養学専攻が設置されていました。故廣畑龍造教授（前九州大学・教授）のご推薦で、学園祖・中村ハル学長先生にご面接した時のお言葉「これまでの研究を活かし、教育にあたってください」は今でもはつきり覚えております。そ

の後、平成二年には、大学院（栄養科学研究科）も設置されました。

現在、ハイセンスの中村理事長と教育研究共に優れた山元学長のリードのもと、大学と短期大学に加え、新学部の設置計画も進んでいます。

三十年の勤務にあたり、ご支援、ご鞭撻を賜った多くの方々に感謝致しますと共に、学園の益々の発展を祈念致します。

『七年間への思い』

食物栄養学科・食物栄養科
教授 吉村 英敏



一日の時間は結構長いように感じられるが、過ぎ去った一年を振り返ってみると、何ともその短かさに驚かされる。こんな思いは決して私だけのものではなく、誰しも感じることもしれない。本学に奉職しての七年間を、いま改めて振り返るとき、私にとってやはりあつという間の七年であつた。

一方、学生諸君の顔を見ながら、戸惑いつつも行ってきた講義の日々あるいはときに褒め、ときに叱りながらも楽しく過ごした卒論・卒研生との研究生活、これらの一つひとつに尽きせぬ思いが過ぎ、終わることを知らない。当然というべきかもしれないが、若者のエネルギーが溢れる職場では、日頃の物忘れのひどさからいやでも思い知

らされる七十才という年齢も、彼等の活力が一遍に吹っ飛ばしてくる。

二十世紀を目前に控え、世界は急速に変わりつつある。本学も新学部の設置計画をはじめ、多くの改革案を引っ提げて一層の飛躍を期している。筆を擱くに当り、これらの成功を祈ると共に、これまで私を支えて下さった多くの方々に心からの感謝を捧げたい。

『学園生活を振り返って 想うこと』

食物栄養学科・食物栄養科
教授 佐々木シナ子



年月が流れるのは早いもので、縁あつて中村学園に勤務して三十七年が過ぎました。昭和三十六年から中村学園女子高校に勤務し、七年目の終わり頃、中村ハル先生から突然「あんた短大の家政科に行きなさい」と博多弁で言葉をいただきました。短期大学に家政科ができて二年目のことでした。

当時、私が担当する教科は被服整理（講義）、被服整理実習、染色実習でした。これは大変なことになったと、当年の夏休みを利用し母校に戻り、これ等教科の内容把握に取り組むカリキュラムを編成したことを思い出します。その後、何度かにわたる教育課程の改訂で教科名、内容も変わっ

健康生活 のススメ

27

食物栄養学科・食物栄養科
助教授 鶴田 八郎

「プールで泳ぐこと」

病は気からと言われるが、これは人の健康は、心と生活環境、食事状況に関わりがあると解釈出来るのだろうか。因みに健康は英語では“good health”である。この言葉から私には“good life”が連想される。私は以前からお酒を飲む習慣を身につけているので、酒の摂取量や、肝臓のことが気になる。新聞記事によると、飲酒による男性の肝臓障害は女性に比べ少ないが、毎日お酒を飲むと、男性は二十年で、女性は十二年で障害をおこす可能性が高くなるという。飲酒の適量はビールなら小瓶一本、お酒なら一合。この量を守ると「酒は百薬の長」とか。

「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケヌ丈夫ナ体ヲ持チ……」という言葉は誰もが愛する言葉だが、日本の風土の中で健康を保ちたいという日本人の気持ちを表している。「早寝早起は健康によい」「百回かめば百まで生きる」などの言葉は、現代人には耳が痛い昔からの言い伝えである。

私の父母は、農村の静かな村で過ごし、草花を愛し、見知らぬ人と出会うのが好きだった。そして生活の中でよく唄を唄っていた。早春の梅の木が花を咲かせる時節を周辺の人々は愛し、その村は健康な生活環境を提供していた。当時の人々が農作業をしている姿を時折思い出すごりである。食事はご飯と少量のおかずで質素なものだった。両親は二人共よく働いていた。そして仲良く暮らしていた。

幼少の頃から農作業を手伝う経験があるが、体を動かすことが健康法だと思っている。

私はいま、つとめて週に2時間程度でも近くの市民プールで泳いだり歩いたりして体を動かすことにしている。

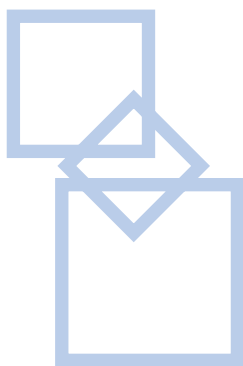


食物栄養学科・食物栄養科
助教授 山内須美子

『睦月有感 (擬レ五言絶句)』

てまいました。スタートの遅かった私にもそれから三十年が過ぎ、思いはつきませんが、その中で特に思うことは家政学演習での学生の真剣でそして楽しそうに物を作っている姿でした。ゼミのテーマは「革で作る手工芸」ですが、私までそれにつられ物作りをし豊かな心で教員生活を送ることができたのは、多くの学生のお陰と今改めて感謝致しています。

学園を去るに当り、本学が二十世紀にむかつてますます発展することを祈念致します。



為東雪雪崩 東の雪は雪崩となり
化西雪大雨 西の雪は大雨と化す
遠春未不來 春は遠く未だ来たらず
知誰將成功 誰か知る
枯万骨不語 將功なりて万骨枯るを
只已去遠礎 礎は語らず去りゆくのみ
ただ
不語道説知 知を説き道を語らず
流浪徒流巷 流浪の徒は巷に流る
不知誰理知 誰か知らん
有礎且有広 知の理を
無益已礎石 礎ありて広がりあり
有為有広域 礎は益少にして
物誰有究理 広がりてこそ有為なる
非一潤万人 理は誰のもの個にあらず
万人にありてこそ潤う

『本学のさらなる 発展を心から祈って』

児童学科・幼児教育科
助教授 小山 逸雄



私はこのたび一身上の都合により退職することになりました。

思い起こせば、七年前、ご縁を得て本学に勤務することとなりました。この間、多くの教職員の皆様、学生諸君、さらに、本学に関係のある方々との出会いに恵まれ、充実した生活を過ごせたことを心からありがたく思っています。

私は主に教師を目指す学生に対して教科教育法、教育実習等について指導しましたが、目的意識を持って努力する人が多いことに驚きました。しかも、

過密とも考えられる教育課程に堪える気力や体力の頼もしき、連発される課題へ対応する努力と誠実さに感じ入っていました。

もし、ここに「自ら課題を求めて自ら解決に没頭できる」ための時間的余裕が十分に与えられたならば、必ずや創意溢れる成果を生み出せると期待しています。いや、それが必ずできる素質を持っている人が多く入学しているのを感じ取っているのです。

今後、社会情勢は急変し、さらに厳しくなることでしょう。しかし、いかに世の大学が大衆化しようとも、本学には建学の精神に基づく伝統のすばらしさを保持できる学生が入学して来るであろうと固く信じています。

本学を去るに当たり、この七年前に賜りましたご支援、ご指導に感謝申し上げますとともに、本学のさらなる発展を心から祈念いたしまして、ごあいさついたします。

ありがとうございました。

◎平成9年度後援会地区連絡会

◎中村学園大学付属あさひ幼稚園創立30周年

◎日本栄養改善学会学会賞

◎全国栄養士養成施設協会会長表彰・全国保母養成協議会会長表彰が決定

平成9年度後援会地区連絡会

— 今年も本学を含め八都市で開催 —

平成9年度の後援会地区連絡会が二月二十二日から三月八日まで本学を含め九州内の八都市で開催された。連絡会では、教育・研究の近況報告とともに、在学生の学修・生活・就職状況に関する全般的な報告と個別面談が行われた。

この連絡会は、より良い教育効果をあげるためには、大学と学生及び保護者が互いに連携をとり協力しあうことが必要であること、また、保護者からの意見も本学の教育研究に出来るだけ反映していきたいとの考えから開催されている。

地 区	実施日	会 場
北九州	2月22日(日)	リーガロイヤルホテル小倉
佐 賀	2月28日(土)	佐賀東急イン
宮 崎	2月28日(土)	宮交エアラインホテル
大 分	3月1日(日)	大分西鉄グランドホテル
鹿児島	3月1日(日)	かごしま林田ホテル
福 岡	3月7日(土)	本 学
長 崎	3月8日(日)	ホテルニュー長崎
熊 本	3月8日(日)	チサンホテル熊本

日本栄養改善学会学会賞

平成九年十月十六・十七日に開催された、第四十四回日本栄養改善学会学術集会で、城田知子教授他四名(児玉寛子・馬込明子・吉田紀子・久山町役場 堺万紀子)に対して日本栄養改善学会賞が授与された。これは「地域高齢者の食物消費構造の五年間の変化について」久山町に

おける栄養疫学研究」の研究成果に対して授与されたものである。

厚生大臣表彰

平成九年十月十六・十七日に開催された、第四十四回日本栄養改善学会学術集会において、古賀靖子助教授が、多年にわたる栄養士としての栄養指導業務の功績に対して、厚生大臣から表彰状を授与された。



古賀 靖子助教授



城田 知子教授

中村学園大学付属 あさひ幼稚園創立三十周年

平成九年十二月八日、中村学園大学において、中村学園大学付属あさひ幼稚園の創立三十周年記念式典並びに祝賀会が開催された。

記念式典では、昭和四十二年の開園以来のあゆみと、創立三十年を迎えてあさひ幼稚園キャラクターマークを制定したことが紹介された。

また、園児による、あさひ幼稚園キャラクターマーキングが披露された。

あさひ幼稚園は初代園長の学園祖中村ハル先生から第九代笠井キミ子園長にいたるまで、「強い子やさしい子考える子」を保育理念に掲げ、千八百

三十七名の卒園児を送り出している。



全国栄養士養成施設協会会長表彰・ 全国保母養成協議会会長表彰が決定

栄養士・管理栄養士養成課程を優秀な成績で卒業する学生を、全国栄養士養成施設協会が毎年表彰しているが、今年も本学から三名が会長表彰を受ける。

また、全国保母養成協議会も保母養成課程を優れた成績で卒業し保母になる学生を表彰しており、二名が会長表彰を受けることになった。

表彰者には、三月二十三日卒業式当日、学長から表彰状が渡される。受賞者は次の通り。

全国栄養士養成施設協会会長表彰

▼大学 食物栄養学専攻

江口 和代さん

▼大学 管理栄養士専攻

福田 英美さん

▼短期大学 食物栄養科

立木 さやかさん

全国保母養成協議会会長表彰

▼大学 児童学専攻

新田 奈央さん

▼短期大学 幼児教育科

丹下 美佳さん

海外出張の記録

氏名・職名①訪問国・期間②目的

橋本 俊郎 教授

①中国 H9・10/28～11/4

②「食品産業における酵素の利用に関する学術交流会」講演および雲南省における食品生産・加工・食生活に関する調査研究

本田 英明 教授

①韓国 H9・11/12～11/14

②韓国済州柑桔研究所主催 The Development of Citrus Processing Technology Seminarの基調講演

